

# 国際協力の現場を語る

JICA（独立行政法人 国際協力機構）は開発途上国の発展を支援するため、実務の経験と知識を持った人達を「JICA海外協力隊」として派遣しています。この人達は海外旅行などでの体験とは違った、海外協力隊ならではの様々な体験をしています。赴任国で体験した、生活、文化、人々との触れ合い、苦労、喜び、伝えたいメッセージなどを熱く語っていただきます。

日 時：毎月第3水曜日 15時00分～16時45分  
 会 場：JICA横浜 Web会議(Zoom)併用  
 会 費：無 料 （どなたでも自由に参加できます）  
 主 催：NPO法人 シニアボランティア経験を活かす会  
 後 援：JICA横浜

(やむを得ず日時・会場が変更される場合があります。事前にシニアボランティア経験を活かす会ホームページ、または下記問い合わせ先に確認して下さい。)

問合せ先：横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜3階 国際協力連絡室内  
 シニアボランティア経験を活かす会 水曜日  
 Fax：045-663-3263 担当：井坂敏之（046-887-0286）  
 URL <https://jicasvob.com> E-mail [info@jicasvob.com](mailto:info@jicasvob.com)



赴任国(講演者)	「タイトル」	講演概要
第205回 2月15日 (水) パラグアイ (金田美穂)		<b>「パラグアイ 田舎隊員の看護覚え書」</b> パラグアイの農村地域にある保健所兼クリニックのような施設で看護師隊員として活動しました。多くの看護師隊員が医療行為を派遣国ではできないという条件で派遣されます。では、一体どのように看護活動を展開するのでしょうか。私が派遣初期に抱えた課題や悩みから、同僚たちと親睦を深めながら共に活動していく中で見つけた新たな看護観までごっくばらんにお話しします。ホームステイでの珍事件や恋愛事情についても語ります。
第206回 3月15日 (水) インドネシア等 (工藤 巖)		<b>「過去の農業開発をSDGsで裁く」</b> インドネシアにおけるコーヒー農場18億円投資の経営不振の再開発に従事。ボトムアップ格言①郷に入れば郷に従え、②異文化社会との共生。改善対策は、1) 農業4分割の・自助努力(競争・協力・学習・実行・評価・改善・普及) 2) 農場と個人一体化・自力更生「志・農・工・商」理論を実行し再開発。「大和魂」文化の推進に努めた。これを現代的物指しSDGsでご検討を願う。
第207回 4月19日 (水) ザンビア (森岡 潔)		<b>「野生動物の宝庫 ザンビア ～学生達と共に学んだ電子工学～」</b> 定年まで1年を残し会社を早期退職、第2の人生としてJICAシニアボランティアに挑戦することになりました。職種はアフリカ南部の国ザンビアの首都ルサカにある、国立ザンビア大学電気電子工学科での講師でした。学生たちは皆まじめで勉強熱心でやりがいがありました。また、休暇を利用して様々な野生動物たちに会うことができ、公私ともに充実した2年間をお伝えします。
第208回 5月17日 (水) カナダ・チリ等 (角井信行)		<b>「娘達のふるさと? カナダとチリ」</b> 総合商社と呼ばれる会社で働いた38年の内、24年を海外5か国で過ごしたが、カナダとチリでは家族四人が一緒に暮らした。娘二人はカナダで6年、チリで5年を過ごし、現地校とインターナショナル・スクールに通った。二人は「私達はパパの海外勤務の犠牲者よ」と冗談を飛ばすが、どんな「犠牲」になったのか、現在50歳前後になった彼女達の姿から見えるものを振り返っておきたい。
第209回 6月21日 (水) パラグアイ (松村妙子)		<b>「パラグアイの日本語教育の未来」</b> パラグアイとアルゼンチンとの国境の街エンカルナシオンは戦後集団移住の玄関口でした。その街の日本語学校に学ぶ子どもたちは日本語を話す機会がほとんどありません。子どもたちにどんな日本語教育が必要? どんな学校が必要? 現地の先生方や移住の歴史の長いペルー、ブラジルの事例に学び、エンカルナシオン日本語学校の将来像を提案しました。この経験を活かして、川崎市の小学校で外国につながる児童の日本語支援を行っています。